

2017年8月27日聖学院教会聖日礼拝説教

「神の民と残りの者」  
ローマの信徒への手紙 11：1-12

菊地 順

今日の聖書箇所冒頭の冒頭で、パウロは、「では、尋ねよう」と切り出しています。それは、問題を整理し、改めてその本質を問おうとすることを語る言葉です。ここでパウロは、改めて、事の本質を問い質そうとしているのです。それでは、その「事」とは何でしょうか。それは、少し遡りますが、9章の30節以降に語られています。そこには、こう記されています。「では、どういうことになるのか。義を求めなかった異邦人が、義、しかも信仰による義を得ました。しかし、イスラエルは義の律法を追い求めていたのに、その律法に達しませんでした。なぜですか」。そう、パウロは問うています。

義を求めていなかった異邦人が信仰による義を得て救われたのに、義の律法を求めていたイスラエルが義に到達せず、救いに至らなかった、それはなぜかと言うのです。一方は、律法の義を求めて一生懸命に励んだのに、それに到達できず、救いに至らなかったのです。しかし、初めから、そもそも義の律法を求めていなかった異邦人が、信仰による義を得て救われたのです。簡単に言えば、一方は努力したのに救われなかったのです。しかし、もう一方は、何の努力もしなかったのに救われたのです。それは、考えて見れば、非常に不公平な、依怙贖賈な話ではないでしょうか。それは、ちょっと卑近な例になりますが、大学入試に似ているところがあると思います。すなわち、一方は、正規の試験を受けて合格を目指します。しかし、努力の甲斐なく、不合格となってしまいます。それに対し、もう一方は、裏口入学です。何の努力もせず、親のコネを頼りに裏口から入学するのです。

あまりいい例ではありませんが、わたしはときどき、キリスト教の信仰は、裏口入学に似ていると思います。正規の入学を目指すのは、ユダヤ教です。神から与えられた律法を厳格に守ることによって合格を目指すのが、ユダヤ教です。しかし、キリスト教は、初めから律法を守ることによって合格しようなどとは考えていません。それどころか、狡いことに、イエス・キリストを頼みとして、裏口から入学しようとするのがキリスト教なのです。言ってみれば、キリスト教にとって、イエス・キリストは、神に対する最大のコネなのです。わたしたちのために死んで下さったキリストがおいでになるのだから、その面子に免じて神の国に入れてくださいと、神にお願いしているのが、キリスト教な

のです。

今日、お集まりの皆さんの中に、ユダヤ教の律法の試験に合格できると自信を持って言える人はどれくらいおられるでしょうか。わたしには、そんな自信はありません。おそらく、その自信を持てる人はいないのではないのでしょうか。わたしたちは、皆、それこそイエス・キリストをコネとして、神の全き憐みによって、この教会に入れられた者なのです。その意味では、みんな裏口入学なのです。逆に言えば、正規の試験で合格しようとするれば、永遠に入れないところが、教会なのです。キリストを通して与えられた神の憐みだけが、わたしたちが教会の一員であることを可能としているのです。

そうだとしますと、ユダヤ教から見れば、キリスト教はそうとう狡い宗教だということになるのではないのでしょうか。少なくとも、イスラエル人であり、その子孫であるユダヤ人のパウロは、そこに、ある種の理不尽さを感じたのです。そして、改めて問わざるを得なかったのです。それが、今日の最初の言葉です。パウロは、「では、尋ねよう」と語るのです。そして、「神は御自分の民を退けられたのであろうか」と問い質すのです。口語訳聖書では、もっと露骨に、「神はその民を捨てたのであろうか」と訳されています。イスラエルとは、神によって選ばれた神の民です。モーセを通して十戒が与えられ、それに基づく律法によって神の民とされた民族です。そのイスラエルが、事もあるように、国を失い、異邦の民に支配され、しかも、その救いにおいても神の義に達しなかったのです。そこには、正に、神によって捨てられたような現実があったのです。その現実直面して、パウロの中に、イスラエル民族としての誇りがめらめらと燃え上って行ったのです。そして、「神はその民を捨てられたのであろうか」と問い質さざるを得なかったのです。

しかし、それに対して下された結論は、「決してそうではない」というものでした。口語訳聖書では、「断じてそうではない」と訳されています。パウロは、「断じてそうではない」と断言するのです。イスラエル民族の誇りにかけて、そう断言するのです。それでは、神から見捨てられたような現実には、どう理解できるというのでしょうか。それに、自ら答えようとしたのが、今日の聖書箇所なのです。

ここでパウロは、まず、自分も、イスラエルに属する者だと宣言しています。神から捨てられたような民族のイスラエルに、自分も属していることを改めて宣言するのです。すなわち、「わたしもイスラエル人で、アブラハムの子孫であり、ベニヤミン族の者です」と。そして、もう一度、念を押すかのように、「神は、前もって知っておられた御自分の民を退けたりなさいませんでした」と語るのです。それには、十分な理由がありました。なぜなら、イスラエルには、神の恵みを継承する「残りの者」がいたからなのです。パウロは、そのことを、

紀元前 9 世紀に北王国イスラエルで活躍した預言者エリヤの出来事を通して語ります。すでに、エリヤの時代においても、イスラエルには不信仰が蔓延していたのです。イスラエル王国の「黄金時代」と呼ばれるダビデ・ソロモンの時代の後に、イスラエル王国は南北に分裂しました。そして、エリヤが活躍した北王国では、ダビデ家が断絶し、政治的な混乱と共に、宗教的な混乱が生じて行ったのです。そして、そうした中に、神から遣わされたのが預言者エリヤでありました。しかし、エリヤは、惨憺たる現実には直面しなければならなかったのです。そして、こう神に訴えなければなりません。「主よ、彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇を壊しました。そして、わたしだけが残りましたが、彼らはわたしの命をねらっています」と。イスラエルの民は、神から遣わされた預言者たちを殺し、神の祭壇を壊し、最後に残された預言者エリヤの命をも狙っているというのです。何と惨憺たる状況ではないでしょうか。それが、神の民と呼ばれ、またそう自負していた、イスラエル民族の実状だったのです。

しかし、それにしても、「わたしだけが残りましたが、彼らはわたしの命をねらっています」というのは、尋常なことではありません。「わたしだけが残された」という深い孤独と共に、命を狙われているという底知れぬ恐怖に、エリヤは捉われていたのです。しかし、そうしたエリヤに対して、神はこう答えられました。「わたしは、バアルにひざまずかなかった七千人を自分のために残しておいた」。このとき、エリヤは耳を疑ったのではないのでしょうか。もはや自分一人しか残っていない、しかも命まで狙われている、と思っていたのに、神は、いや、「バアルにひざまずかなかった七千人を自分のために残しておいた」と告げたのです。「バアルにひざまずかなかった」というのは、異教の神・バアルになびくことなく、イスラエルの神・ヤーウエの信仰を守り通したということです。しかも、それが「七千人」いるというのです。それは何と力強い数ではないのでしょうか。二人、三人いる、というのではないのです。何と七千人が、まだ神の働きをするために残されているというのです。

確かに、七千人というのは、イスラエル民族全体から見れば、微々たる数かもしれません。しかし、大多数の不信仰なイスラエル人の数と、「バアルにひざまずかなかった七千人」とは、数の上では雲泥の開きがありますが、神の働きにおいては、それは決して劣る数字ではないのです。この話を聞いて、ある人は、主イエスが行った 5 千人の給食の話を思い起こす人もいられるかもしれません。マタイ福音書 14 章には、主イエスが 5 つのパンと 2 匹の魚で 5 千人を満腹にしたという記事が記されています。5 つのパンと 2 匹の魚というのは、5 千人という数からすれば微々たるものです。しかし、主イエスは、その微々たる数で 5 千人を養ったのです。そこに、神の業があります。そのことを思い出すと、七

千人というのは、決して微々たる数ではないのです。それどころか、勇気千倍の数なのです。その七千人を、神は残りの者として、御自分のために、そしてエリヤのために、残して置かれたのです。

パウロは、イスラエル民族が神から捨てられたような現実に直面して、この出来事を思い起こしたのです。そして、さらにこう確信を持って語ることができたのです。「同じように、現に今も、恵みによって選ばれた者が残っています」。現に今も、恵みによって選ばれた者が残っている。パウロは、神の恵みが変わらないのであれば、エリヤの話は遠い過去の話ではなく、今の話でもあると確信できたのです。そして、エリヤのために七千人が残されていたように、今、この時代にも、このイスラエルのために、残りの者が残されていると確言することができたのです。そして、それこそが、「神は御自分の民を退けられたのであろうか。決してそうではない」と断言できた根拠であったのです。

ただ、ここでパウロは、この残りの者とは誰かということは論じていません。ただ、それは、恵みによって選ばれた者であると語るだけです。残りの者とは、選ばれた者なのです。なぜなら、それは、本人の行いによって残りの者となったのではなく、あくまでも、選びという恵みによって残りの者とされたからなのです。そして、恵みによってということは、もっと具体的に言うならば、信仰の義によって救われた者ということなのです。行いの義、律法の義によってではなく、恵みの義、信仰の義によって救われた者、それが選ばれた者なのです。そして、それは、もっと具体的に言えば、主イエスにつながる者のことなのです。主イエスの贖いの恵みを信じることによって主イエスにつながり、神の救いに与った者のことなのです。ですから、もっと端的に言えば、それはキリスト者のことです。パウロは、7節でこう語っています。「では、どうなのか。イスラエルは求めているものを得ないで、選ばれた者がそれを得たのです。他の者はかたくなにされたのです」。イスラエルは求めているものを得ないで、選ばれた者、すなわち信仰の義によって選ばれた者が、それを得たのだと語るのです。

しかし、ここで話が終われば、神から捨てられたようなイスラエル民族の救いはありません。ここまでは、イスラエルは「かたくなにされた」存在でしかなく、そこには到底救いはありません。しかし、パウロは、ここから、残りの者を媒介とした、どんでん返しを語るのです。11節をご覧ください。ここでパウロは、改めて、「では、尋ねよう」と切り出しています。11章の1節で、「では、尋ねよう」と始まった議論を、ここでもう一度仕切り直して、改めて、「では、尋ねよう」と語り出すのです。そして、こう問い質しています。「ユダヤ人がつまずいたとは、倒れてしまったということなのか」。1節では、「神は御自分の民を退けられたのであろうか」と問い質しましたが、ここでは、言葉を変え、

「ユダヤ人がつまずいたとは、倒れてしまったということなのか」と問い質すのです。しかし、ここでもパウロは、「決してそうではない」と断言します。そして、その理由を、こう語り出しています。「かえって、彼らの罪によって異邦人に救いがもたらされる結果になりましたが、それは、彼らにねたみを起こさせるためだったのです」。これは、なかなか奇妙な議論ではないかと思えます。イスラエルの民が罪に陥り、義の律法に到達できなかった結果、異邦人が信仰の義によって救われるに至ったと言うのです。しかも、それは、そのことによってイスラエルの民にねたみを起こさせるためであったと言うのです。口語訳聖書では、「イスラエルを奮起させるためである」と訳されています。いずれにしても、本来救われるはずのイスラエルの民ではなく、異邦人が、信仰の義によって救われるに至ったのは、イスラエルの民が妬みを起こし、奮起するためであったと言うのです。すなわち、パウロの議論においては、あくまでもイスラエルが中心なのです。イスラエルが妬みを起こし、奮起するためにこそ、異邦人の救いがあったのだと言うのです。そして、それは、イスラエル全体が救われるためでありました。パウロは、最後にこう語っています。「彼らの罪が世の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのであれば、まして彼らが皆救いにあずかるとすれば、どんなにかすばらしいことでしょう。」

パウロは、残りの者がいるゆえに、神の民イスラエルも、神に退けられることはないし、またつまずき倒れてしまうこともないと断言するのです。そして、終には、残りの者を介して、イスラエル全体も救われると語るのです。ここでは、それはまだ希望的表明ですが、それが最終的に目指されていることは明らかです。

パウロは、残りの者がいるゆえに、未だ罪の中にいる者にも救いがあると言うのです。その限りでは、残りの者の存在は、すべての者の救いの可能性を語るものであり、またその希望そのものでもあるのです。そして、主イエスの贖いの恵みに与った者は皆、その残りの者でもあるのです。しかし、それは、パウロが具体的に誰だとは言わなかったように、現代においても、それを客観的に特定することはできないのです。洗礼を受けたクリスチャンが皆残りの者だとは言えません。洗礼を受けた者の中にも、イスラエルの民と同様に、神から退けられたような人もいるからです。また教会に連なっているとしても、それで残りの者とは言えません。形だけでは、誰もその内実を判断できないからです。残りの者の基準は、パウロが語ったように、「恵みによって選ばれた者」なのです。主イエスの贖いの恵みを信じ、主にあって神と一つに結ばれている者なのです。そして、それは、外見では分からないのです。また、自分自身でもよく分からないところがあるのです。なぜなら、わたしたちの信仰は、力強い時があれば、力弱い時もあるからです。霊的に満たされていると感じる時もあ

れば、靈的に枯渇していると思える時もあるからです。そのことを思いますと、残りの者と特定できる人はいないとも言えるのではないのでしょうか。特定の人を指して、あの人は残りの者だ、あの人はそうではない、などとは言えないのです。むしろ、主イエスにつらなる者であっても、神から退けられる時もあるれば、神によって残りの者として用いられる時もあると考える方が正しいのではないのでしょうか。同じ人でも、ある時は退けられ、ある時は、残りの者として用いられるのです。ただ、わたしたち自身としては、絶えず残りの者となるべく、自らの信仰の歩みを正していくことが大切なのです。

スイスの法律家で、『眠られぬ夜のために』という著書で有名なカール・ヒルティは、その書物の中でこういうことを語っています。「弱い信仰でも、全く信仰がないよりはるかによろしい。最後の小さな信仰の火種をもすっかり消してしまうことのないようにしなさい。そうすれば、またそれを吹きおこすのは、容易である。だが、初めから新しく火をつけるのは、ずっと困難なものである」(『眠られぬ夜のために』第一部、181頁)。ヒルティは、信仰の火種を消さないようにすることが大切だと語ります。それは、火種さえあれば、たとえ信仰が弱くなっても、再びそこから信仰が大きく燃え上がることができるからです。私は、残りの者というものは、この火種に似ているのではないかと思います。昔、田舎では囲炉裏の生活をしていましたが、夜寝る時には、囲炉裏に火種を残して寝ました。それは、灰をかぶせ、火の勢いを最小限に抑え、燃え尽きないようにしながら火種を維持したのです。そうしておくで、翌朝、灰を取り除き、火種を出し、それに炭を加えれば、簡単に大きな火を作ることができた訳です。残りの者というものは、そうした火種のような存在ではないのでしょうか。そこから、再び、信仰が燃え上がって行くのです。そして、それは、イスラエル民族の中にも存在したし、また教会の中にも存在するだけではなく、またわたしたち自身の中にも存在すると言っているのではないのでしょうか。そして、その火種がある限り、たとえ信仰が後退し、薄れても、再び燃え上がることができるのです。そういった火種が、残りの者として、神は、この世界に、またわたしたち一人一人の信仰の中に、残しておられるのです。そこに、たとえわたしたちの信仰が打ちひしがれるような時があるとしても、立ち上がっていく希望があるのです。そして、その希望から、パウロも、「決してそうではない」と語ることもできたのです。

その信仰の火種を消すことがないように、またそれだけではなく、人々にとって、わたしたちの歩みが信仰の火種となっていくことができるように、歩むことが大切なのです。そして、もう一つ、付け加えてお話をすれば、その火種を守り、大きくしていくのは、この礼拝においてなのです。ヘブライ人への手紙4章9節には、「安息日の休みが神の民に残されているのです」と記され

ています。神の民には、安息日が残されているというのです。毎週訪れるこの聖日は、決して当たり前のことではないのです。それは、神がその民のために残して下さった時であると言うのです。さらに 11 節では、「だから、わたしたちはこの安息に与るように努力しようではありませんか。さもないと----墮落する者が出るかもしれません」と語られています。わたしたちに恵みとして与えられている安息日を、それにふさわしく守ることが大切なのです。そして、墮落することがないように、むしろ、信仰の火種を守り、それを大きくし、この世にとっても、残りの者として主に用いられるように歩むことが大切なのです。

新しい週が始まります。また新しい月を迎えようとしています。この週も、主の恵みに感謝しつつ、主と共に力強く歩む中で、信仰の火を燃やし続けながら、それぞれの置かれたところで、願わくば、残りの者として用いられるよう、歩んでいきたいと思えます。